

# 「ワレンシュタイン」の1節について

小川清彦

この短文で私は「ワレンシュタイン」の1節においてコールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772—1834年) が果たして誤訳をしたのであったろうかということについて、私見を述べてみようと思うのである。

この点を最初に論じたのは“Star-Names and their Meanings”の著書で知られているアレン (Richard Hinckley Allen) だったらしい。私がそれを承知したのはかつてリン翁 (英国の天文学者) が「オブサバトリー」誌<sup>1)</sup>上でこのことについて述べたものを読んでからである。問題の1節は次の通りである。

Kein Sternbild ist zu sehn! Der matte Schein dort,  
Der einzelne, ist aus der Kassiopeia,  
Und dahin steht der Jupiter. Doch jetzt  
Deckt ihn die Schwärze des Gewitterhimmels!

コールリッジの英訳はボーン叢書によると、

No form of star is visible! That one  
White stain of light, that single glimmering yonder,  
Is from Cassiopeia, and therein  
Is Jupiter. But now  
The blackness of the troubled element hides him!

鼓(常良)氏はこれを訳して (岩波文庫)、

1) “The Observatory” 英国グリニッジの王立天文台によって 1877 年に創刊された。

星の姿は一つも見られぬ。あそこのぼんやりとした唯一の光はカシオペア星座から出ているのだ。あの方向にジュピターがある。だが今は嵐の空の黒雲に覆われているのだ。

としている。これらの訳者はいずれも木星がカシオペア座、もしくはその方位にあると解しているので、ドイツ語にかなりの自信をもっている友人、松本某君（京城大学教授）の解釈もやはり同様であるところをみると、これが一般の解釈であることが明らかである。してみるとシルレル<sup>1)</sup>は木星が決してカシオペア座などにあり得ないという、ごく簡単な天文知識をすら心得ていなかったと断定すべきであろうか。言い換えると彼はカシオペア座が北極付近の星座であり、木星は常にほとんど黄道上にあり、そして黄道上の点は赤道から20余度以上は離れていないということを知らなかったとみるべきであろうか。ここに議論が分かれるのである。

アレンはコールリッジがまるで天文学を知らないので beyond とか in that direction とか訳すべきを therein などと、とんでもない訳し方をしてしまったのだといている。だがこの beyond にせよ in that direction にせよ五十歩百歩であって、何のためにそんなことを言うのか訳がわからない。

リンの考えではこの意味はカシオペア座あたりに星の光らしいものが見えたので、眼を転じて木星のある方向を眺めたが、黒雲におおわれていて見えなかったというのだと言っている。しかしそれでは全然、原文を離れた解釈になってしまう。

<sup>ひっきょう</sup>畢竟これらの学者は初めから原文に誤謬なしとする前提からこじつけを言っているので、コールリッジはとんだ馬鹿をみているわけである。コールリッジの訳が誤りだとすれば、これらの学者を除いた他のほとんど総ての人にシルレルを正当に解する能力がないということになる。そんな馬鹿なことがあってたまるものではない。手宮の古代文字<sup>2)</sup>、あるいは神楽歌<sup>3)</sup>中の文句ではあるまいし、近

1) ヨーハン・クリストフ・フリードリヒ・フォン・シラー (Johann Christoph Friedrich von Schiller)、(1759—1805年)。ドイツの詩人、歴史学者、劇作家、思想家。ベートーヴェンの交響曲第9番「合唱付き」の原詞の作詞者として有名。

2) 1886年(明治19年)頃に北海道で発見された文字。アイノモジ、アイヌ文字とも呼ばれる。

3) 日本の神道における神事で催される神楽において歌われる歌。歌詞は概ね31字。奈良朝期に作られた。

代ドイツ語は一般の人の解釈する通りに解釈しておいて何の誤まれるところがあるろう。いわんやシルレルは詩人であって天文学者ではない。その書いたものが一般人に解せられずしてわずか2、3の天文学者にしか正当に解釈されないということは考え得べきことであるかどうかということを考えてみることだ。

最初からこの1節は誤っていると、あっさり片づけてしまえば問題は起こらなかったのである。それを強いて誤りを訳者の方になすり付けようとするから問題が起こってくる。私は彼等が何故に一目誤りの明瞭なシルレルを強いて弁護し、かえって何等責を負うべきいわれのないコールリッジを、攻撃するかを怪しむのである。

前記の1節はシルレルがワレンシュタイン<sup>1)</sup>をしてその予想だもしなかった暗殺直前に、行なった観測について語らしめているものの一部分であるが、これを書くためには、当夜の天象について相当に調べていたものと推定される。それは決してシルレルの単なる想像力のみで書き得べきものではない。というのは月があったこと、木星が西天にあったことが共に事実だったからである。しかし空のどの辺に見ていたかは、無論彼には分からなかったであろう。それが分かっていたら、シルレルはそれを利用したかも知れないので、何もカシオペア座などをかつぎ出す必要を感じなかつただろうとも考えられる。ぼんやりとした唯一の光がカシオペア座から出ているというのが事実の記載ではなくシルレルの創作であることは言うまでもないが、この唯一の光が月から出ていると直してみると、その方角（真西）には木星が確かにあった（月から10度ばかり下）ことになって、誤訳問題など起こる余地はなかつたであろう。当夜、上弦後の月は双子座の西端にあり、木星は牡牛座にあって、月とアルデバランのちょうど真中辺りにあったのでカシオペア座からは60度ばかりも離れていた。

それでもし好意的に解するならば、シルレルは詩人として単に発音の好ましい

1) アルブレヒト・ヴェンツェル・オイゼービウス・フォン・ヴァレンシュタイン (Albrecht Wenzel Eusebius von Wallenstein)。1583年ボヘミア生まれ。三十年戦争期のボヘミアの傭兵隊長。神聖ローマ帝国の皇帝フェルディナント2世に仕えて、帝国大元帥・バルト海提督・フリードリント公爵となる。1634年2月25日、裏切りの可能性を疑われて皇帝の命令で暗殺された

ところから意識してカシオペアを、ひっぱりだしたのではなかろうか。とすればそれを強いて弁護するのは彼にとってむしろくすぐったい話であろう。

終りに注意しておきたいことは、普通にワレンシュタインの殺された日を1634年2月25日としているのはユリウス暦での日付であるということである。そしてこのことは「ワレンシュタイン」を読んでもみればわかるのである。

『天文月報』巻24、No.2(1931)

- 
- ・『小川清彦著作集 古天文・暦日の研究——天文学で解く歴史の謎——』（齊藤国治・編著、皓星社、1997所収）
  - ・読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
  - ・理解を助けるために脚注を附した。
  - ・書名には『 』を附した。
  - ・PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X} 2_{\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、`dvipdfmx`を使用した。
  - ・科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

・「科学図書館」に新しく収録した文献の案内, その他「科学図書館」に関する意見などは,

「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか, 書き込みください。